

「日本の建築」について 2010年秋学期国内特別研究報告

内 田 祥 士*

要旨

「日本建築史」を高等教育の教科書或はそれに近い内容の書籍と捉え、「日本の建築」を前者よりも幅広い読者を対象とした書籍或は著者の建築観を強く反映した意匠論と考える慣例がある。戦前に書かれた「日本建築史」を戦後再刊するに際して、その内容を踏襲した上で「日本の建築」と改名した例もあるが、これも、この慣例の範囲内のことと考えて良い様に思う。

この研究は、技術史を軸として「日本の建築」を構想するに際して、私の建築観を明確にし、その建築観を背景に、その記述範囲をどの様に定め、どの様に構成するかを検討しようとしたものである。その成果については、最終的には、同名の著作の刊行を以て完成させなければならないが、特別研究に充てられた期間の検討を通して得られた知見を、機会ある毎に発表し、その構成を試行錯誤している。「戦後の建築」の軸となる部分を「定常化社会の建築 -生産から維持へ-」(atプラス08)掲載の中で、「奈良の建築」に関わる部分を、本年10月の東洋大学公開講座で部分的にはあるが、それぞれ組込んで執筆或は発表してきた。

ここでは、それぞれの原稿或は発表資料から該当部分を抽出し研究報告とする。

1 「定常化社会の建築 -生産から維持へ-」(atプラス08掲載) より

定常化社会の建築

ここで考えようとするのは、高齢化と少子化が進む非成長社会がその状態で存続すると考えた場合、即物的な意味での建築ストックは、その変化が見えないか暫減しつつあるということになる訳だが、その時、どのような状況が想定されるかという問題である。営繕とは営造と修繕を一体化した概念であるが、営造よりも修繕が、即ち維持が中心になる時代ということになる。ならば、その主要な課題は、今、私達を取巻く建築の維持ということになる。

成長社会から定常化社会への転換が、極めて大きな価値観の転換を伴うことは、誰もが承知しているところではある。その最大の理由は、営造と修繕の近代化された姿を生産と維持と呼ぶとすれば、後者の組合せが、近代化が極めて不可逆性の強い転換であったために、強い対立性を持つ概念になってしまっているからであると申し上げて差し支えないだろう。生産から維持への転換は、大きな摩擦を伴う転換で、定常化社会とは、決して成長の果てに予定調和的に訪れる社会ではない。

非成長社会の前は、実に半世紀にも及ぶ成長社会であった。しかもその前半は、驚異的な高度成長を成遂げた社会であった。私達の前にある建築ストックの殆どは、この時代を通じて供給されたものである。そこで、まずは、既存ストックがどのようなものであるかを確認する必要がある。

* 東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科

量を担った技術

戦後社会は、建築に限らず工業化と切っても切れない関係にある。サラリーマン家庭のあこがれであった三種の神器は新旧いずれも全て工業製品であった。今でもその事実が変わりはない。その存在を無視して戦後は語れない。建築も同様である。工業化住宅、所謂プレファブに限らず、あらゆる建物にとって、工業化部品は欠くことの出来ないビルディングエレメントである。しかし、この様な状況が一般化するのには、高度成長期以後のことで戦後直ちにではない。

敗戦直後、荒廃した国土を前にした建築家や研究者にとって最大の社会的要請は、住宅の供給それも大量供給だった。この時、彼らが夢見たのが工業化住宅であった。灰燼に帰した都市の再建にとって、住宅の工業化は必須であると考えられた。後に商品化住宅と呼ばれることになるプレファブ住宅である。今改めて、その概要を簡便に記すとすれば次の様な説明になると思う。

住宅部品を構造部材から間仕切りに至る迄標準化し乾式化する。乾式構法というのは、建築部品を予めパネル化し現場でそれを組立てる構法の総称で、これに対して左官やコンクリートの様に現場で練ったり固めたりする構法を湿式構法と呼ぶ。乾式化された建築部品は工場で生産する。工場なら高品質で均質な建築部品を大量に生産出来る。大量生産が実現すれば価格破壊は必然である。そうなれば、あらゆる建築部品を誰もが直ちに廉価に確保する事が出来る。現場ではこれらの部品を組み立てる作業が中心になるので、従来の様に熟練工に頼らなくても住宅建設は可能である。結果として、高品質な住宅を安く大量に供給し住宅不足を解消することが出来る。

確かに説得力のあるビジョンである。ならばと、建築家は競ってその試作に情熱を燃やし、人々への啓蒙に力を注いだ。そこでは判で押しした様に木製パネルが用いられコンクリートのPC化が提案された。しかし、どんなに優れた技術でも、どれほど可能性を感じさせる目標でも、新しい技術である以上、実現には相応の懐妊期間が必要である。しかも国土も生産設備も灰燼に帰している。工場も材料も燃料も殆ど無い状態である。不足している住宅戸数は、建築家や研究者が幾ら努力しても、直ちに実現出来る様な戸数ではなかった。事実、工業化住宅が現実のものとなるのは、即ち、工業化住宅が量を担う迄に量産されるに至るのは1970年代に入ってからである。戦後の住宅着工戸数が日本の総世帯数を上回るのが1970年代初頭のことであるから、住宅の工業化が現実化した時には、量に関する限り需要は満たされていたことになる。勿論、それは単に量的な充足であって質的にはいろいろな問題を抱えていた。公団住宅に対する遠くて狭いという苦情はその典型であった。工業化住宅が商品化住宅という名称で地位を確保していった背景には、こうした事情があった。では、実際に量を担ったのはどの様な建築技術だったのだろうか。

戦後の高度成長期、実際に量を担ったのは、潤沢な熟練工に支えられた在来木造と鉄筋コンクリート造であった。在来木造とは伝統構法の近代化された姿であり、鉄筋コンクリート造とは戦前の震災復興以来の新しい耐火耐震構法である。特に、耐火性と耐震性を合わせ持つ鉄筋コンクリート造への期待は極めて大きかった。両者とも近代の洗礼を受けた技術であるが、工場よりは現場に力点を置き、乾式構法よりは湿式構法に、単純労働よりは熟練労働に依存する傾向の強い建築技術である。では、両者が相互に自立した確固たる技術であったかと言えば決してそうではない。都市防火の観点から、特に都市の中心部に於いては在来木造から鉄筋コンクリート造への転換が進みつつあったし、1970年代に量を担う迄に成長する工業化住宅の波が、工業化部品として急速に両者の中に浸透しつつあったからである。組織転換も着実に進みつつあった。潤沢に存在した町場の大工組織や職人町は近代的な営繕組織である工務店へと改編されていったし、更に加工場を手放して型枠大工へと転換していった人々も少なくなかった。左官組織も次第にコテを手放しクロスやペンキを扱う組織へと転換していった。工期は短縮され価格破壊も始まっていた。建築生産の近代化は確実に進みつつあった。近代化である以上この変化は屢々不可逆的であった。こうした転換を近代化の成果と捉えるか、伝統技術の崩壊と考えるかは意見の分かれるところだが、工学的には成果であり歴史的には崩壊であったと申し上げる以外に無い。工業化を啓蒙する側は、伝統構法は民芸の様になるべきものと考えて人が多かったし、それと対峙する側は、職人組織の崩壊に危機感を募らせていた。従って、その担い手にとっても、常

に明るい希望のもてる転換であった訳ではなかったし、苦渋の決断であった場合も少なくなかったはずである。

そして先にも述べた様に1970年代に入ると、住宅の量的充足を背景に、均質な量産型から需要側の好みやライフスタイルに合わせることで出来る多品種少量生産型へと転換した工業化住宅が、今日言われるところの商品化住宅という新しい名前で、漸く市場に明確なシェアを確保する迄に成長してくるのだが、こうなると、在来構法よりも工業化住宅を、伝統的な大工組織や工務店よりも住宅メーカーを評価すべき客観的根拠は、最早見出し難い。新しい世代の建築家の中には、工業化部品の相対化や伝統的な生産組織の再評価を通して新しい可能性を探る動きが顕在化する様になり、工業化を啓蒙してきた側からも、その性急な市場拡大を問題視する専門家が現れる様になった。また、共に住環境の向上を目指しているとはいえ、何事についても開放性を要求する研究者と、閉鎖性を武器に市場での生き残りを目指す企業経営者との考え方の隔たりも次第に拡大していった。こうした推移の中で、研究者の脱工業化指向或は木造指向が徐々に進み始めるのだが、この流れは、オイルショックを契機に顕在化し、建築技術分野の主要な研究テーマが、工業化から在来木造へ、更には伝統構法の再評価へと転換していくことになる。この転換の背景には、弱体化しつつ在る在来木造の競争力強化という社会的要請もあったのだが、矛盾も多かった。

本来なら、工業化の過程で、在来木造の側に留まった人々が、或はそれを擁護してきた側が、工業化の行過ぎを批判し自らその失地を回復するというのが戦後社会の在るべき姿のはずである。私もそう思う。しかし、当時、彼らの側に事態を変える力があつたかと言えば決してそうではなかった。寧ろ、工業化を押し進めた側が転換したのだから、今度こそ実質的な変化が期待出来ると歓迎する向きが多かった様に思う。今、私達が定常化社会の入口に或るとの認識に立った場合、その私達を取り巻く建築ストックは、以上の様な建築技術と価値観の転換過程で出来上がったものである。

建築の維持について

以上の概説からも明らかな様に、定常化社会の建築を考える上で、工業化の問題は避けて通れない最大の難題である。20世紀を通して工業化の問題を考え続けたバック・ミンスター・フラーは、その著書の中で「あらゆる工業製品は短命化する」と繰り返して述べている。建築が、構法上の相違を超えて、それを構成する建築部品の大半が工業化部品であるということであれば、工業製品としての性質を色濃く反映せざる得ない。ならば、建築も「あらゆる工業製品は短命化する」という流れから逃れ難いことになる。もしもフラーの言う通りなら、今、私たちが持っているストックは極めて複雑な重合体であるだけでなく、短命化の過程にあるということになる。ならば、私たちが考えるべきは、この様な建築ストックをいかにして延命していくかという問題である。確かに、パソコンや携帯電話を見る限り短命化は確実に進んでいるとの印象であるし、環境対応型への買替え奨励政策等を見ていると、行政の側もこの流れを促進しているかにも見える。実際、住宅の寿命は一時期20年代に迄短縮されたかに見えた時期もあった。その折には、平均寿命八十歳なら三回は買替え需要が発生する計算になるという話が現実的な可能性として論じられた。勿論、短すぎるという意味であったと記憶するが、工業化社会が買替え需要を常に見込んで生産設備を維持している事実は誰もが知るところでもある。では、どの様にして維持していけばよいのだろうか。

建築技術として耐久性と向き合っている最終的な部位は、やはり構造体である。勿論、設備の更新や防水の劣化、内外装の陳腐化等、建築の建替え理由は様々であるが、建築技術という視点から考える限り鍵を握っているのは構造体である。構造体さえ維持出来ていれば、他は何とかなるからである。その構造体の最大の劣化要因が地震である。地震が最大の劣化要因であるということは、例えば全国的な規模で統計をとると、建築の耐用年数と地震の周期との間に相関関係があるという意味では無い。私が申し上げたいのは、建築の構造体が、耐震性に主眼をおいて設計されているという事実の方である。しかし、これは些かわかりにくい議論である。というのは、耐震性とは、耐震強度という言葉が用いられることから明らかな様に「強さ」であって、耐久性という言葉が要請する「時間」とは直接結びつかないからである。では、なぜ地震に対す

る「強さ」が耐久性という「時間」を決める主要な要因となるのだろうか。

耐久性と耐震性とは本来的には夫々独立した性能である。詳述は避けるが、地震に対する「強さ」が材料の品質と深く結びついた性能であるのに対して、耐久性に対応する「時間」というのは使用する材料の量に依存する傾向の強い性能である。この点に注目すれば、構造材の体積が大きいほど、重量が重いほど耐久性は長くなる傾向があるということになる。

さて、日本の場合、地震が最大の劣化要因であるから、地震の無い地域よりも、構造体をより「強く」する必要がある。今ここに充分堅牢に設計された木造の構造体があるとしよう。この構造体の「強さ」をより向上させる為にも最も分かりやすい方法は、例えば、より強度の高い材料に変更すればよいだろう。例えば同じ寸法の鉄骨に変えれば相当丈夫になるに違いない。時にはそれも大切な選択肢である。しかし、地震に備える為に材料を変更するというのは余り一般的な方法ではない。通常は、材料は今のままとして、代わりに各部材の断面積を大きくするという方法が採用されるはずである。この点については、鉄骨造や鉄筋コンクリート造でも同様である。柱や梁そして壁の断面積を大きくするというのは建物の構造体をより堅牢にするために最も一般的な、そして極めて有効な方法である。地震の無い地域を訪れたことのある方なら、例えば、同じ鉄筋コンクリート造の建物なのに柱や梁の寸法が日本に比べて随分細いと感じた事があるはずである。この寸法差は、勿論、「強さ」の証であるが、同時に、もし震災に見舞われなければ、断面積が大きいということは、使われている構造材の体積が大きい或は重量が重いということであるから、結果として耐久性が向上している可能性が高いことになる。震災に見舞われた場合でも構造体が持ちこたえてくれれば補修や補強によって強度を回復できるはずであるし、それによって構造体全体の体積が更に大きくなっていけば、耐久性も向上する可能性が高い。ここで可能性という言葉を用いたのは、強度が実験によって確かめることの出来る性能であるのに対して、耐久性の方はシミュレーション等によって予測することしか出来ない性能であるという点に配慮したもののだが、考え方としては、金属部品等が繰返し荷重を受けて破断する、所謂疲労破壊を防ぐために予め疲労しやすい箇所の厚みを増すことで耐久性を向上させるのと同じ原理である。

私自身は、フラーの予言が必ずしも建築に直ちに当てはまるとは考えていないが、最も悲観的な場合を想定し彼の予言が正しいとしても、地震という強大で且つ不確定な劣化要因が存在することが、逆に耐久性の確保に積極的な働きをしている可能性は否定出来ないと考えている。ならば、定常化社会における私達の仕事とは、たとえ短命化しつつあるにせよ、国際的には極めて堅牢な躯体を如何にして疲労破壊から守っていくかであると言って良いだろう。決して悲観すべき状況ではない。

先ほど、耐久性はシミュレーションによって予測するものであると申し上げたが、実証済みの構法というのも実は存在する。それが、それこそ法隆寺以来、実験を繰返して来た伝統構法であり、それを母体とする在来木造である。こちらは、耐震性と防火性には問題が多かったものの、耐久性に関しては、実にその問題点から対処方法に至る迄詳らかな構法であった。私自身は、伝統構法そのものが量を担えるとは考えないが、維持という概念を含む構法、即ち「営繕」という視点からから見ると、実に示唆にとんだ技術である。但し、現在私達が直面している問題は「営繕」における「修繕」ではなく「生産」に対する「維持」の問題である。示唆は得られても直接的な可能性として受けとめるのは難しいだろう。

さて、最早明らかな様に「建築維持」とは、既存ストックをスクラップにして「建築維持」を十分顧慮に入れた定常化社会に相応しい建物に建替えていこうという意味での「維持」ではない。これから新たに建設する建物を定常化社会にとって好ましいストックとして計画する事の重要性は認めるが、敗戦直後の様なストックレスの状況で未来を論じるべき時期ではないからである。この点については、1981年施行の所謂「新耐震」への対応の多くが建替えではなく耐震改修という補強によって行われており、今尚、多くの既存不適格建築物が残っている事実を思い出せば誰の目にも明らかだろう。定常化社会の前提は、今私たちの前にあるストックである。私はそう考える。近年の動向を見る限り、この点については概ね合意形成が出来ているとの印象であるが、一応、スケルトンインフィルと呼ばれる新しい考え方についても触れておきたい。

これは、建築の構造体が他の多くの建築部品に比べて十分に長い事実を考慮して、構造体としてのスケル

トンと内外装や設備等のインフィルを、構法的のみならずその所有権に至迄明確に分離し、優れた耐久性を持つ構造体が内外装や設備等の更新に巻き込まれることの無い様にしようという考え方である。優れた考え方の様にも思われるが、私は、こうした問題を供給側が合理的に予測できるとは考えていないし、その様な構法や施工法が、直ちに量を担い得るだけの力を持っているとも考えない。それは、高度成長期に量を担うべく構想された工業化住宅が、実際には期待された時期には量を担う迄に至らず、寧ろ、在来木造や鉄筋コンクリート造が工業化部品を受入れつつその役割を担った経緯と、量的充足が成立した後に、商品化住宅という形で急速に市場でのシェアを拡大し、在来構法を圧迫した経緯を確認すれば明らかだろう。少なくとも私には、需要喚起の手段以上の可能性は見出せない。建築に関する限らず、供給側の提案とは、あくまで「私は」或は「私達は」という限定的な前提で、客観的な意味で「社会的な要請」を背景にした普遍的なものではない。

建築の維持とは工業化技術によって短命化傾向にある非耐震部材と、耐震性能の確保という目的の為に結果として耐久性を堅持している可能性の高い構造体等の耐震部材とが複雑に絡み合った既存ストックを、如何に維持していくかという問題である。ここで再度確認しておきたいのは、地震という規模も時期も不明な劣化要因の存在が、結果として、私達の建築ストックをより耐久性の高い建築にしている可能性があり、定常化社会に於ける建築維持は、この可能性を無視しては適切な成果を期待出来ないという点である。私はそう考えている。

2 2011年東洋大学公開講座「建築遺産入門編－奈良とローマ」第1回「奈良」より

私達は何を見ているのか

私達には、奈良に行けば奈良時代がある訳ではなく、ローマに行けば古代ローマがそこにある訳ではないことは重々わかっていながら、しかし、何処かでそれを期待しつつ訪れるという構図がある。この講座では、古都の建築を私達が見る姿、即ち今の姿という観点から検討している。私達は、何を見ているのかという問題提起である。「奈良」では、この問題を、建築技術という視点から捉え、在来木造に於ける「営繕」という述語の意味を考えてみようとしてみた。具体的には、建築遺産としての奈良の諸建築の現在の在様を説明した上で、それに対する建築家としての私の見解を示すという構成で「私達は何を見ているのか」について検討を行った。

事例として、だれでも知っている、即ち、修学旅行等で一度は訪れたことのある、法隆寺・法輪寺・法起寺・慈光院・薬師寺・東大寺・興福寺・唐招提寺の諸堂と平城宮内の大極殿・朱雀門等を取上げ、その当初の在様を日本建築史の記述から、その現代の姿を写真と識者の評価から、知見を得、その相違点や共通点について検討を行った。

足立康と津田左右吉

歴史観という点から、足立康の「日本建築史」（昭和一五年十一月 地人書館）から「今日吾々が伊勢神宮に拝するやうな建築意匠は、既に遠い上代に於て大成されて居り、木造建築の様式としては、極めて高度な完成を示してゐるのであって、この建築精神を正しく継承してゐるものが即ち眞の意味での日本建築であらねばならぬ」といった記述を、一方、「津田左右吉歴史論集」（岩波文庫版・初出「思想」特輯（日本精神）昭和九年五月）から「日本精神を知ろうとするものは過去の歴史にそれを求めるのが普通のものである。日本の民族生活に長い歴史があるとすれば、日本精神の語が如何なる意義に用いられるにせよ、それは歴史的に漸次養われてきたものに違いないから、何を日本精神とすべきかを知るに当たって、歴史による外に道のないことは明かである。（中略）けれども、日本精神という或る固定したものが、古今を通じて動かずに変らずに、存在するというのではない。」といった記述を取上げ、近代に於ける史観の展開について検討を加え、歴史観によっても見方が異なることを明らかにした。

和辻哲郎と吉田鉄郎の唐招提寺金堂観

和辻哲郎の「古寺巡礼」と吉田鉄郎の「日本の建築」から唐招提寺金堂に関する記述を抜き出し、両者の評価の違いの意味を検討した。

軒先の線が両端に至ってかすかに上へ彎曲しているあの曲がり工合一つにも、屋根の重さと柱の力との間の安定した釣り合いを表現する有力な契機が潜んでいる。天平以後のどの時代にも、これだけ微妙な曲線は造れなかった。そこに働いているのは優れた芸術家の直観であって、手軽に模倣を許すような型にはまった工匠の技術ではない。

そういう感じを抱きながら堂の正面へ出て、堂全体をながめると、今さらながらこの堂の優れた美しさに打たれざるを得なかった。

和辻哲郎著 「古寺巡礼」岩波文庫版・初版大正八年五月

金堂は落ち着いた重厚な、長方形の平面で、大きく突出した寄棟で被われ、吹放ちの柱廊のある建物である。屋根は後世の修復で当初の軽快さを失い、建物の美しい形は損われた。それにもかかわらず既に述べた東大寺の法華堂とならんで、唐招提寺の金堂は八世紀のみならず仏教の寺院建築としてすぐれた建築作品として挙げられるだろう。

吉田鉄郎著 「日本の建築」東海大学文化選書・初版昭和二七年（ドイツ）

上記の二人の印象は対照的である。和辻が、唐招提寺金堂の現在の姿を、天平の工匠との関連で論じているのに対して、吉田は、現在は見ることの出来ない当初の姿を想像し、その想像上の姿と、現在の姿とを比較し、「軽快さを失い、建物の美しい形は損われた」と結論付けているからである。目の前にある古建築を件名に観察し、そこから天平の工匠の美意識に迫ろうとする和辻と、想像上の建築の姿を、実際に存在する建築と比較し、その美醜を論じ得る吉田との間には、相当の距離がある。一般的には、和辻の視点から鑑賞するのではないが、吉田の視点は、建築家という職業故のものとも思われるが、両者の相違は「私達は何を見ているのか」を考える上で、実に示唆に富んだ、考えるべき課題を含んでいる。

この屋根は、実は非常に複雑な仕組になっている。図01の左端が当初の金堂断面である。この軸組に、江戸時代・元禄期に桔木の入った野屋根に支えられた屋根に改修され、その後更に、明治の修理の折に、和小屋の中央部分がキングポストラスに更新され、現在に至っている。従って、正確には天平の軸組の上に元禄の屋根が乗り、それを明治のトラスが支えているという構造になる。

また、唐招提寺金堂は奈良時代の建立で、野屋根の成立は平安時代であるとされている。軒が、屋根荷重から開放されるのは、どんなに早くても平安時代以降ということになるから、招提寺金堂の軒は、現在の様な重厚な屋根では無いが、奈良時代の、吉田の言説に従えば、当初の「軽快」な屋根を実際に支えていた軒である。唐招提寺金堂の軒は、実際に屋根荷重を支える能力を持った軒なのである。この点については、例えば、ほぼ同じ形式・規模で、室町時代に再建され建立当初から屋根の荷重を殆ど考慮する必要のなかった垂木によって構成された興福寺東金堂の軒と比較すると、その力感には明らかな相違が有る。図02

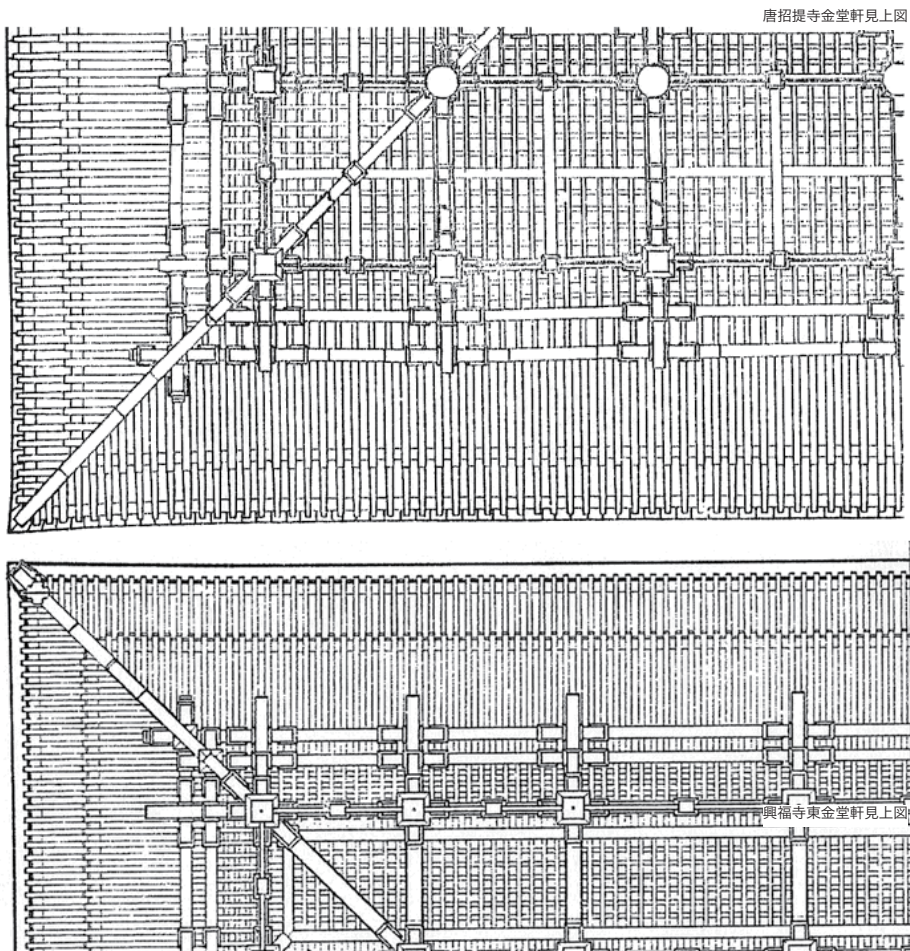
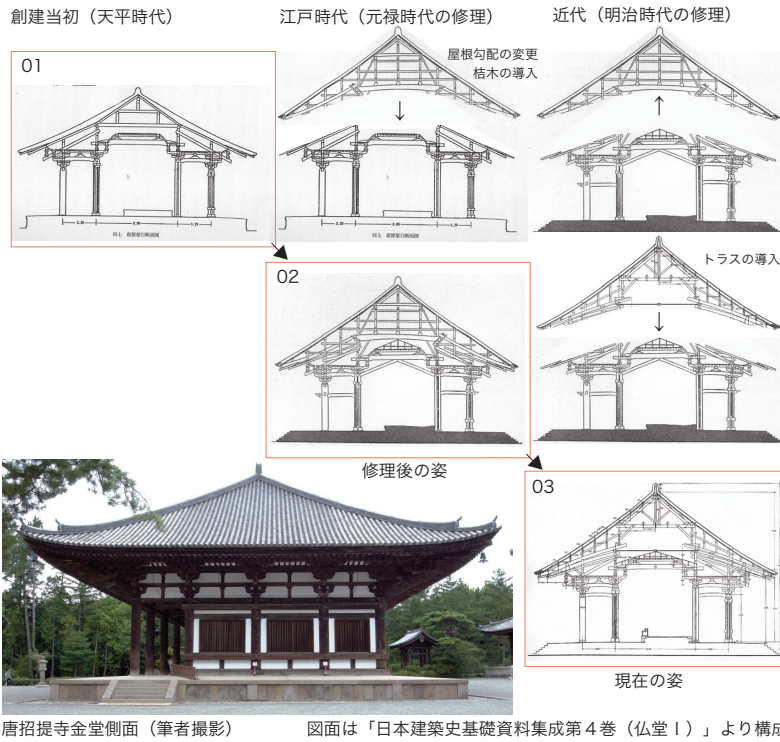
以上の事実から、現在の姿は、決して天平時代の「優れた芸術家の直観」によるものではない。しかし、和辻の発言は、目の前にある唐招提寺金堂の姿を高く評価した上で、その根拠を採ったものであるから、その姿の全てが天平時代の「優れた芸術家の直観」でなかったからといって翻る評価では無いと考えるべきだろう。客観的には、彼を感動させたのは、建立当時の軸組と元禄の屋根そして明治の構造によって支えられた、まさに1200年以上に渡る歴史の賜物としての金堂の姿であった。

一方、吉田の、今は決して見ることの出来ない天平当初の姿を想像しつつ、それを現在の金堂と比較し、当初の姿の優越性を語るという視点では、想像上の姿と現実の姿とが対等に扱われる。これは建築家或は専門家ならではの評価ではあるが、こうした視点も存在し、両者の評価を直接比較することは難しいというこ

とになる。一方、解体修理で明らかになった屋根の構造は、客観的な事実を示してはいるが「私達は何を見ているのか」という問いに対する答えとしては分かりにくい。事実そのものが、答えを与えてくれる訳ではない。

最後に -営繕という言葉めぐって-

最後に、在来木造に於いて「営繕」とは、本来、建築物の営造と修繕を一体化した概念である。この言葉の理解こそが、「日本の建築」を考える契機として、また、古建築の現在を健在化させるに際して、即ち、「私達は何を見ているのか」という問いを設定する背景として、注目すべき点である訳だが、「定常化社会の建築 -生産から維持へ-」でも述べた通り、「営造」という述語を「生産」と、「修繕」という述語を「維持」と結びつけて考えざる得ない私達には、古建築の「営繕」の営みを、文字通り「営繕」として理解する術が既に奪われてしまっている。更に、この問題は、見る側のみならず修理工事に携わる側にも有る程度浸透していると考えるべきであり、「私達は何を見ているのか」という問いとともに、極めて多様な論点を提供している。



図面は「日本建築史基礎資料集成第4巻 (仏堂1)」より構成